

あんたが大將 夜桜編

馬込 駒

あんたが大将 夜桜編

「月に群雲、酒に花…… アクターレの趣向としては上出来だと思わんか、フェンリッヒ」

太い桜の木の根元に座り幹に上半身を預けたヴァルバトーゼが盃を掲げて月を見上げる。

「御意に」

フェンリッヒが慇懃に頭を下げ

「上出来って何が気に入らないヴァルバトーゼ」

盃を待ち七輪の前に座っているアクターレが聞き返す。

「それだ、それ。イワシは生が一番旨いというのに何故火を通さなければならないのだ」

ヴァルバトーゼの指さす先には焼き網の上にきちんと並んだイワシが美味しそうな香りを上げて焼き上がっていた。

「炙った魚を肴にして呑むって言うのが通の呑み方なんだよ。多少は妥協しろ」

箸で掴んだイワシを器用にヴァルバトーゼに投げながらアクターレが言い返す。

「……生の方が旨い」

「猫だって火を通した方が喜ぶんだから諦めろ」

頭からかじったヴァルバトーゼの呟きにアクターレがため息混じりに答え

「閣下を猫呼ばわりするな」

「呼ばわりはしていない、比較対照にしているだけで。ほい」

しゃがんでいるアクターレが立っているフェンリッヒに箸でイワシを投げ、ふてくされたままフェンリッヒが飛んできたイワシを掴む。

「熱っ！！」

フェンリッヒが真上にイワシを放り上げ

「何で熱くないと思ったのか聞きたい」

天高く舞ったイワシを目で追いながらアクターレが呟く。

「うるさい」

落ちてきたイワシを片手で掴んだフェンリッヒがそのまま頭からかじる。

「旨い」

「だろ。酒の肴にはもってこい」

笑って答えるアクターレにフェンリッヒも唇の端を上げる。

「生の方が旨い……」

「酒を呑んでいる間ぐらい我慢しろ」

「それは違うぞ、アクターレ」

拗ねていたヴァルバトーゼが真顔になる。

「酒、月、桜、夜。ここまで完璧なのにイワシだけ生でない事が残念なだけだ」

真顔で拳まで握りしめてヴァルバトーゼが力説する。

ヴァルバトーゼの言葉通り、見事なまでの桜だった。山の中に一本だけ生えた山桜なので華やかさには欠けるがその分艶やかな桜が時折吹く風に花卉を踊らせる。立っているフェンリッヒが無造作に髪をかきあげ髪にまと

わりついた花卉を振り払う。

「お前に生のイワシを渡したら桜見ないでイワシを堪能するだろうが」

いい加減本気で怒りだしたアクターレが七輪の前ですごむ。

「今夜の主演は桜、イワシは後」

言い切られヴァルバトーゼが黙り込み空を見上げる。

月明かり。桜色と緑の間から覗く闇。艶やかに闇に踊る桜色の花卉。

ようやく黙り込んだヴァルバトーゼが盃に口を付ける。ワインとは違った透明な酒が喉を通る。酔いはしない。ただ味わうだけ。判っているからアクターレがそういう酒を用意したのだろう。『ファン』からの差し入れだろうが。

「お前、こういうコアなファンより浅いファンを増やした方が票につながらないか？」

同じ事を考えたのだろう、フェンリッヒが意見し、そんなフェンリッヒの肩に肘を寄せたアクターレが

「趣味と実益」

にやにやと笑ったアクターレの肘をフェンリッヒが弾き、弾かれたアクターレが笑いながらフェンリッヒにイワシを投げ、フェンリッヒが片手で受け取る。

「イワシを粗末に扱うな」

二人のやりとりを見上げていたヴァルバトーゼが注意する。

「申し訳ありません」

「悪かったな」

慇懃に、神妙に二人が頭を下げる。

そして又、黙ってヴァルバトーゼが天を見上げる。闇、桜色、緑。そして満足げにため息をついた。